

# 異文化理解教育

－鹿児島純心女子短期大学における取組と成果－

堀江 美智代

Intercultural Understanding Education

－Instruction and Achievement at Kagoshima Immaculate Heart College－

Michiyo Horie

---

グローバル化はビジネスの世界に限らず、教育において重要な研究課題となっている。小学校から高校に至るまで異文化理解教育に取り組み、自治体や民間団体は各種の異文化交流活動を進め、高等教育機関では、「国際理解」「異文化コミュニケーション」のような科目が多く開講されるようになった。この異文化交流や異文化理解を促進する現象は、今後も広く着実に進展するものと考えられる。

本稿では、鹿児島純心女子短期大学英語科における「異文化理解」の授業について紹介し、学生に質問紙調査を行なった結果を分析し考察する。まず、異文化や日本文化に対する理解度、英語力向上に関する有益度、学習した内容で特に効果的な授業内容について分析する。次に、学生が異文化についてプレゼンテーションを実施しカルチャーファイルを作成することの意義と課題について考える。調査の結果、「異文化理解」の授業は異文化や日本文化に関する理解を深め、学生の多くが、プレゼンテーションやカルチャーファイルの作成を肯定的に評価していることが判明した。

**Key Words:** 異文化理解, 質問紙調査, 短期大学, 授業展開, プレゼンテーション

---

(Received September 11, 2017)

## 1. はじめに

グローバル化が進む中、教育分野において、国際理解教育や異文化理解能力の重要性が指摘されて久しい。国際理解教育は、1945年に発布された「ユネスコ憲章」を出発点にユネスコにより推進されてきたが、日本の教育界において、国際理解の観点が特に注目を浴びるようになったのは、1987年の臨時教育審議会による最終答申が契機だったといわれる（溝上・柴田, 2009）。この最終答申において、「国際化への対応のための具体的改革」として、外国語教育の見直しや国際理解のための教育の推進などの方針が示された。また、臨時教育審議会の答申(文

---

\* 鹿児島純心女子短期大学英語科 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

部科学白書, 2001) により, 国際化への対応として, 昭和63年度から高等学校における留学制度を設け, 高等学校段階の留学生交流が拡大するなどの様々な国際交流の機会が増加している。さらに, 外国語教育の改善のため, 多数のネイティブ・スピーカーを招致するなどの諸施策が実施された。留学生の受け入れに関しては, 21世紀初頭には10万人の留学生を受け入れることを目標とする「留学生受け入れ10万人計画」の達成に向けて, 各般の施策が行われてきた。

さらに, 文部科学省は, 2013年より留学促進キャンペーン「トビタテ! 留学JAPAN」を開始した。また, 政府だけでなく, 官民協働で「グローバル人材育成コミュニティ」を形成し, 将来世界で活躍できるグローバル人材を育成することに取り組んでいる。これらの取組により, 「日本再興戦略～JAPAN is BACK」(2013年6月14日閣議決定)において掲げた目標である東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年までに大学生の海外留学12万人(現状6万人), 高校生の海外留学6万人(現状3万人)への倍増を目指している。実際, 留学後の感想として, コミュニケーション力と異文化理解能力の向上を指摘する学生は多い。

本稿では, 日本にしながら, 異文化理解を促進するにはどのような授業を構築すべきなのかについて考察する。具体的には, 鹿児島純心女子短期大学(以下「本学」)で「異文化理解」の授業を実践している著者の取り組み(授業の概要)を紹介し, その成果をさぐるために実施したアンケート調査結果を分析し考察していく。さらに, 今後の異文化理解教育で取り組むべき課題について述べていく。

## 2. 調査の背景

### 2.1 異文化理解教育

教育における「異文化理解」は, どのように扱われているだろうか。現行の『高等学校学習指導要領』(2010)によれば, 「異文化理解」の目標は, 「英語を通じて, 外国の事情や異文化について理解を深めるとともに, 異なる文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図るための態度や能力を養う」ことである。その内容として, (1)日常生活, (2)社会生活, (3)風俗習慣, (4)地理・歴史, (5)伝統文化, (6)科学技術, (7)その他異文化理解に関することが挙げられている。内容の取扱いにおいても, 「実際の交流などのコミュニケーション体験を通して理解を深めるようにするとあるように, 外国の人々と英語を使って電子メールの交換をしたり, 直接会って話をしたりするなどの活動を通して, 外国の事情や異文化について理解を深められるように配慮することが大切」とされている。また, 「異文化を理解するということは, 外国の事情や異文化に関する知識を得ることにとどまらず, 自分の文化の相対的關係において理解することであり, 日本の事情や文化などを取り上げることも大切であると記載されている。

文部科学省は, 平成29年3月に中学校学習指導要領を公示した。その解説(文部科学省, 2017年7月)の中で, 外国語科の目標は, 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ, 外国語による聞くこと, 読むこと, 話すこと, 書くことの言語活動を通して, 簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝えあったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としている。さらに, この目標を基に, 育成を目指す資質・能力の3つの詳細な目標を設定している。そのうちの一つは, 「外国語の背景にある文化に対する理解を深め, 聞き手, 読み手, 話し手, 書き手に配慮しながら, 主体的に外国

語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことである。改定前は、「言語や文化に対する理解を深め」となっていたが、今回の改定により、相手の外国語の文化的背景により「配慮」の仕方も異なることを踏まえ、他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育成することがさらに必要とされている。つまり、英語教育と異文化理解教育を切り離して考えることはできない。

では、実際に日本の教育現場にいる教師たちが、異文化理解をどのくらい重要視しているのだろうか。ベネッセが実施した「中高の英語指導に関する実態調査2015」によると、指導において「外国語や異文化に対する興味を高めることは、とても重要だ」と回答しているのは中学校で77.3%、高校で72.0%とかなり高いが、「その指導を十分実行している」と答えている教員は、中学校で22.8%、高校で23.7%とかなり低くなっており、重要だと思いつつも十分に実行できていないことがわかる。

## 2.2 本学英語科における「異文化理解」の授業

「異文化理解」は、本学英語科専門教育科目の選択科目として1年次後期に開講されている。2016年度は、休学者を除く1年生60名全員が履修した。2クラスに分かれ、各クラスの人数は31人と29人であった。15回の講義内容は、表1のようにになっている。授業の到達目標は、次の3つである。

- (1) 日本文化についてより深く知り、英語で説明することができる。
- (2) 多様な文化や価値観を受容し、異文化に対して理解を深めることができる。
- (3) 日本文化と異文化について調べ、発表したり、英語でカルチャーファイルにまとめたりすることができる。

表1 「異文化理解」の講義内容

回	内容
1	Culture (文化とは)
2	Intercultural communication (異文化コミュニケーション)
3	世界がもし100人の村だったら (1) シミュレーション
4	世界がもし100人の村だったら (2) 問題と解決策
5	世界を見る目が変わる50の事実
6	日米テレビコマーシャル比較 (1) 言葉とイメージ
7	日米テレビコマーシャル比較 (2) 比較広告と公共広告
8	Food and drink (地球の食卓「世界24か国の家族のごはん」)
9	Ceremonies (儀式, 結婚式)
10	Verbal and nonverbal communication (言語と文化, 非言語コミュニケーション)
11	Traditional dramas and entertainment (伝統芸能, 歌舞伎, 文楽, 能)
12	Sports and festivals (スポーツ, 祭り)
13	Education (世界の学校教育)
14	Stereotype, prejudice and ethnocentrism (ステレオタイプ, 偏見, 自民族優越主義)
15	Cultural diversity (文化の多様性)

授業の準備学習として、学生は、毎回教科書やプリントを読みワークシートの解答をしていく。また、異文化に関するトピックについて、グループでプレゼンテーションの準備をし、パワーポイントを活用した発表を行う。さらに、最終プロジェクトとして、個人で日本と異国の文化について5つ以上のトピックを選び調査し、英語で特徴や相違点などをまとめカルチャーファイルを作成する。教科書は、『イラスト日本まるごと事典改訂第3版』（インターナショナル・インターンシップ・プログラムズ、2010）を使用し、必要に応じてプリントを配布している。筆記テストは、中間試験のみ実施している。

評価方法は、カルチャーファイルが40%、プレゼンテーションが20%、テスト・宿題・クラスへの参加が40%である。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 調査方法

2016年度後期に異文化理解の授業を受けた本学英語科の1年生60名を対象に、Moodleを活用した意識調査を実施した。無記名でアンケートへの回答を求めたものである。調査は、後期の授業終了後2017年2月1日に行なった。「異文化理解」の履修者60名中58名が回答し、回答率は96.7%である。

#### 3.2 調査内容

アンケートは、3つのパートからなり、Part Iが「異文化理解」の授業に関する質問、Part IIが異文化交流に関する質問、Part IIIが学生個人の現状認識と将来の希望に関する質問である。質問項目は全部で27問であるが、本稿では、Part IIの授業外で実施された異文化交流体験に関する質問項目に関しては分析から除外し、Part IとPart IIIの将来の希望についてのみ分析する。内容は、「異文化理解」の授業の有益度やその影響等について、選択肢を選んで回答する質問項目と、授業の中で取り組んだプレゼンテーションやカルチャーファイルの課題などについて、自由に記述できる質問項目から構成されている。尺度については5段階ではなく、4段階の尺度を用いた。

## 4. 結果と考察

#### 4.1 「異文化理解」の授業の有益度

図1は、「異文化理解」の授業の有益度を示している。「異文化理解の授業は、異文化について理解を深めるのに、どの程度役に立ったと思いますか」という質問に対し、「とても役に立った」という回答が53人（91.4%）、「少し役に立った」という回答が5人（8.6%）であり、全員が異文化理解の深化を高く評価している。一方、日本文化について理解を深めるのに、「とても役に立った」と回答しているのは44人（75.9%）、「少し役に立った」は14人（24.1%）であり、日本文化より異文化に関する理解が深まったといえる。

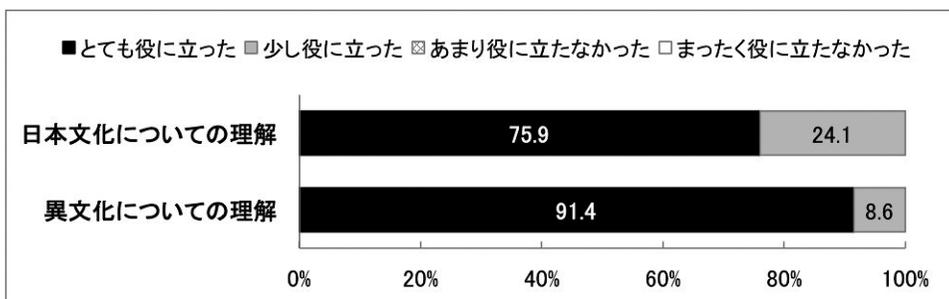


図1 授業の有益度

#### 4.2 外国の事情や異文化に対する理解が深まった授業内容

図2は、「異文化理解」の授業で学習した内容で、特に、外国の事情や異文化に対する理解が深まった内容を複数選択した回答結果である。「世界を見る目が変わる50の事実」という回答が最も高く（82.8%）、続いて「世界の学校教育」（72.4%）、「世界がもし100人の村だったら」（62.1%）、「地球の食卓 世界24か国の家族のごはん」（58.6%）、「世界の結婚式」（58.6%）の順であった。上位にランクしている授業は、ビデオや写真などの視覚教材を使用して進めたものである。

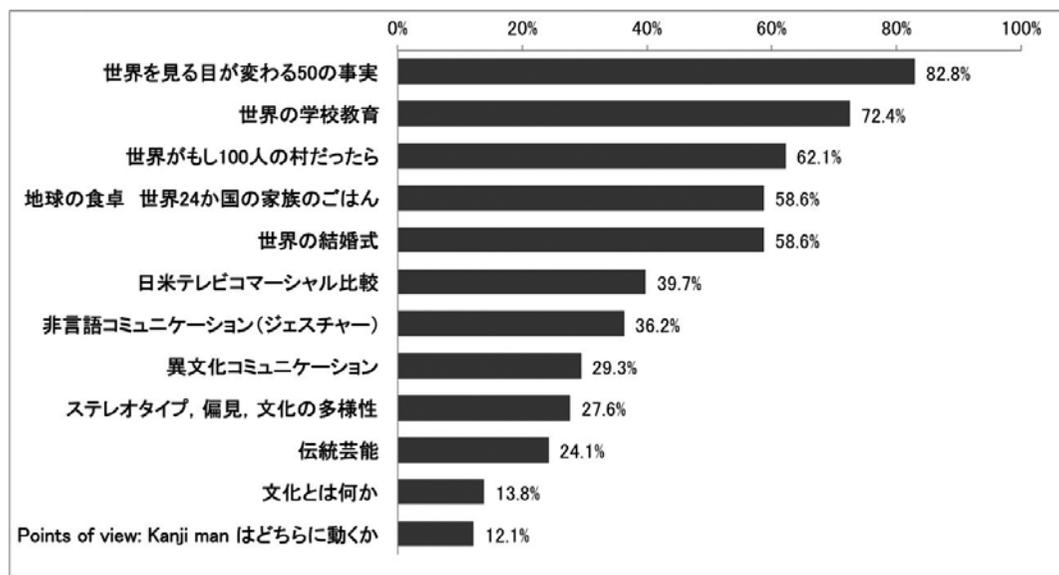


図2 異文化に対する理解が深まった授業内容

『みんなで考えよう 世界を見る目が変わる50の事実』（2007）は、BBCのジャーナリストであるジェシカ・ウィリアムズが書いた本であり、各国政府や研究機関のデータを集めて、貧困・病気・差別・環境汚染といった世界の諸問題（50のトピック）について、数字を挙げて短くま

とめてある。授業では、著者ウィリアムズが「世界一受けたい授業」というテレビ番組に出演した時のビデオやワークシートを活用して紹介した。著者は、読者がこれまで知らなかった世界の問題や真実を知ること、もっと世界に目を向けることを期待している。いくつかその事実を挙げると、「世界で3人に1人は戦時下に暮らしている、2040年に原油は枯れてしまうかもしれない、日本人女性の平均寿命は84歳でポツワナ人女性の平均寿命は39歳、地球温暖化の影響で年間15万人が命を落としている、毎年10の言語が消滅している、ロンドンの住民は、監視カメラで1日300回撮影される」等である。大切なのは物事を客観的に見る事であり、客観的に数字を見る事で、深刻な問題だと知る事ができる。学生も、この世界の実事について、具体的に知ることによって外国の事情や異文化に対する理解が深まったと考えられる。

「世界の学校教育」の授業においても、『新版 世界の学校－教育制度から日常の学校風景まで－』（2013）の著者である二宮皓が、「世界一受けたい授業」というテレビ番組に出演した時のビデオを活用して紹介した。ビデオを視聴する前に、視聴前のポイントを提示し学生に該当国を推測させた。具体的な質問例を一部挙げると、「①水、土、日曜が休みで、週4日の学校がある国は？ ②世界一厳しい進級制度がある国（小学校でも落第する国）は？ ③小学校でクラス替えがない国は？ ④「開拓者養成」という科目のある国は？ ⑤国際学習到達度調査（PISA）2003年調査で子供の学力が世界一になり注目を浴びた国は？ また、どうして学力が高いのか。⑥授業中に発言したい時、日本では手を開いて挙げるが、フランスやドイツでは、どうするか？ モンゴルではどうするか？ ⑦1年間に受ける授業時間（小学校）が最も長い国は？」などである。ビデオ視聴後、解答チェックと世界の教育に関するプリントを配布し解説している。例えば、フィンランドはPISA2003年調査で注目を浴び、PISA 2015年調査（国立政策研究所、2016）においても、OECD加盟国35か国中、科学的リテラシーが3位、読解力が2位、数学的リテラシーが8位とトップクラスの学力を維持している。世界的に見て、フィンランドの授業時間数は多くないが、1クラス20名程度の少人数クラス編成を実施し、勉強がついていけない生徒にはさらに少人数クラスで補助教員をつけて指導しているため、学力が高いと考えられる。他に、学力トップの理由として、読書が盛んな国であることや、教員の質が高いこと、つまり、大学院を修了してはじめて教員の基礎資格を得ることができることなどが挙げられる。学生は、世界の学校における教育文化を比較的に考察することで、各国の教育の特徴や問題点に気づき、好奇心が刺激されたようである。今後は、日本の外国語教育についても、海外の外国語教育の現状から比較検討していきたい。

『世界がもし100人の村だったら』（池田&スミス、2001）は、世界をひとつの村にたとえ、人種、経済状態、政治体制、宗教などの差異に関する比率はそのままに、人口だけを100人に縮小して説明している本である。その英文を元に、筆者がワークシートを作成し、世界の現状と問題点について理解を深め、解決策を模索する授業を実施した。英語版の元は、1990年5月31日に発表されたに環境学者のドネラ・メドウズ氏の新聞エッセイらしい。「ザグローバルシチズン村の現状報告」というタイトルで、「もし世界が1000人の村だとしたら」という1行で始まっている。日本では、2001年3月にアメリカ、ワシントン・DCで元世界銀行に勤務していた中野裕弓が、元同僚から受け取ったものを日本語に訳したのが最初だといわれる。また、同年2001年には翻訳家の池田香代子とC・ダグラス・ラミスが再話し、日本語に訳して出版している。

授業では、まず、開発教育協会が出版している『ワークショップ版世界がもし100人の村だったら第5版』（2016）を参考にシミュレーションを実施した。学生は、予習として、「100人村」の英文レターを読み、ワークシートの質問に解答してくる。授業では、役割カードを配布し、他の人には見せないように伝えて始める。役割カードには、性別、年齢（大人か子ども）、日本の場合の年齢、住んでいる地域と栄養状況、使用している言語、挨拶の言葉、識字に関する表記と意味が記載されている。「100人村」に描かれた世界を、まず、シミュレーション（疑似体験）という参加型の方法で体験してもらうことが目的である。学生は、役割カードの情報に従って、男女や年齢別、地域別に手を挙げたり分けられたりして世界の人口の割合や構成の違いに気づき、インドや中国で女性が男性より少ない理由等について考える。また、世界の各大陸の大きさや人口を概観することで、アジア地域の人口密度が高い現状を知り、世界の人口の約8割が開発途上国に住んでいることを認識する。世界には多様な言語が存在することを実感し、少数言語が消滅している現状を知る。また、世界には文字が読めない人たちが多くいることを知り、文字が読めないことによって生じる危険や問題について考える。さらに、世界全体の所得の配分が不公平であることを体験し、「シャンパングラスの世界」に描かれるような所得格差が改善されていない現状を知る。

次に、グループで「100人村」を1人一段落ずつ英語で輪読し、各々が一番印象に残った箇所をひとつ選ぶ。さらに、どうしてその箇所を選んだのか、どうしてその問題が起こっているのか、また解決策などについてグループディスカッションを実施する。さらに、レポートの課題がある。レポートには、「100人村」に出てくる問題から1つ選び、その背景や原因について考え、解決策として、①学生自身ができること、②学校・地域でできること、③国・世界でできること、それぞれの場面で何ができるかを考え、具体的なアクションプラン（活動計画案）を書かなければならない。このアクションプランを立てる活動も、『ワークショップ版世界がもし100人の村だったら第5版』を参考にしている。「世界がもし100人の村だったら」の授業に取り組むことで、世界の現状や貧富の格差等を疑似体験し、世界の様々な問題をどのように解決していくと良いかを考えるきっかけになったと思う。公正な地球社会を築くための行動につながることを期待するものである。

『地球の食卓—世界24か国の家族のごはん』は、世界24か国30家族を訪問し、それぞれの家族と1週間分の食料をならべて撮影した写真集である。世界30家族と1週間分の食品のポートレート、食事風景を中心とした一家のルポルタージュ、1週間分の食品リスト、各家庭のご自慢のレシピ、食の問題を提起する6つのエッセイを収録している。著者のピーター・メンツェルとフェイス・ダルージオは、かつてパプアの密林の奥地に住む原住民を訪ねた際、日々の食料に事欠き栄養不良を起こしている彼らが、インスタントラーメンを生のままかじっている姿にショックを受け、この写真プロジェクトをスタートさせたといわれる。それぞれの国の「家族のごはん」という身近な話題から世界の今を見据えている。

著者であるピーター・メンツェル氏が来日し、「世界一受けたい授業」というテレビ番組に出演した時のビデオと著書を活用して、授業を行った。まず、ビデオを視聴する前に、視聴前のポイントと9か国の国名を提示し学生に該当国を推測させた。具体的な質問例を挙げると、「①1週間の食費が一番高い国と安い国はどこか。それはなぜだと思うか。②フランス、ドイツ、

グリーンランド、ブータン、キューバ、アメリカ、日本のそれぞれの食卓で特徴的なことは何だと思おうか。③何故、食費に差があるのか」などである。次に、ビデオ視聴後、世界の食卓に関するプリントを配布し、解答チェックと解説をしている。例えば、1週間の食費が一番高いのはドイツで、特徴としてはビールの消費量が多く日本の約2倍である。サプリメントの消費も多いが、缶やペットボトルの食品がないのは、リサイクルに対してかなり先進的に取り組んでいる国だからである。1週間の食費が一番安いのはチャドで、長く続く内戦のため、彼らの食材は国連から支給されており、調味料をこどもが働いて買っている。地球的な視点では、世界の総食糧生産量は地球の全人口を充分満たすだけの量があるにも関わらず、うまく食糧が配分されていない。その原因の一つは戦争である。学生達は、地球の食卓の写真を通して、世界の人たちが今どんな状況にいるのかを知り、食にまつわる諸問題について学ぶことができる。さらに、自分自身の食生活やライフスタイルを見直すきっかけになる内容であり、学生も興味を持ったと考えられる。

「世界の結婚式」の授業では、学生は西洋の一般的な結婚式についての英文を読みワークシートの質問に答え、結婚をテーマにした映画「ベスト・フレンズ・ウェディング」の結婚式の場面を視聴し、西洋の結婚式の具体的なイメージをつかむことができたと考えられる。また、「なんでもワールドランキング ネブ&イモトの世界番付」というテレビ番組で放映された「結婚式が派手な国ランキング」から、インドの結婚式について紹介し、日本との違いなどを解説した。結婚式に集まる人数が最も多いのが、インドで643人、日本は62人で54か国中41位である。日本とインドの結婚の違いとして、招待状に出席欠席の欄がないことや前夜祭があること、結婚式場は屋外で行い、新郎が白馬に乗ってパレードをし、指輪の交換ではなく花輪の交換があること、日本のように歌などの余興はないことなどが挙げられている。結婚というのは若い学生達にとっても、大変興味深いトピックであり、日本と比較しながらさらに興味が深まったと考えられる。

「日米テレビコマーシャル比較」の授業が、「外国の事情や文化に対する理解が深まった」とする割合は39.7%で6位である。授業は、「テレビ広告から見た日米文化比較」(秋山, 1994)を参考にして、筆者がCMを録画し授業に活用したものである。学生は、日本とアメリカのテレビCMを視聴し、その特徴について考え比較する。特に、ことばの使用・比較広告・出演者・公共広告の4つの観点から、日米の文化の特徴や国民性等について考え討論することになっている。第1回の授業の流れは、表2のとおりである。

学生は、この授業に参加して、アメリカのテレビ広告の特徴として、言葉を多用することや比較広告が多いことに気付くことができる。また、その要因の一つとして、アメリカはコミュニケーションがコンテキスト(状況)に影響されることが少ない「低コンテキスト文化」であり、言語コードに込められた情報に依存することが考えられる。その結果、「高コンテキスト文化」を代表する日本では、コミュニケーションが、言語よりそれを取り巻く状況に頼る度合いが大きく、その場の全体的雰囲気から、情報を読み取る察しの能力が要求されることがわかる。この授業の最後に、学生は日米のテレビCMの特徴としての次のキーワードを分類する。つまり、アメリカの特徴として、multicultural nation, hard sell, low context culture, direct, word-oriented, individualism, competition, frankなどがあり、日本の特徴として、low racial diversity,

表2 日米テレビコマーシャル比較 第1回の授業の流れ

区分	時間	学生の活動
導入	15分	1 4人グループを作る。 2 プリント（テレビ広告からみた日米文化比較）を受け取り、Before You Watchの質問に答える。実際に視聴する前に、日本とアメリカのテレビCMの違いを比較し予想する。
展開	65分	3 アメリカと日本のテレビCM（薬と食品）を視聴し、その特徴について考えプリントに記入する。意見を発表する。 4 マリーキャレンジャーのCMを再度視聴し、プリントの質問に答える。 5 エビグラタンのCMを再度視聴し、プリントの質問に答える。 6 上記2つのCMを比較し、グループで意見交換をする。「アメリカのテレビ広告の特徴」の空欄を埋める。 7 アメリカと日本のテレビCM（比較広告）を視聴し、その特徴について考え、意見を発表する。 8 ケロッグ社とトータル社のシリアルCMを視聴し、質問に答える。 9 ペプシのCMを視聴し、プリントの質問に答える。 10 サランラップのCMを視聴し、プリントの質問に答える。 11 ペプシとサランラップのCMを比較し、グループで意見交換をする。
まとめ	10分	12 「比較広告の特徴」の空欄を埋める。 13 最初の予想と実際に視聴してどうだったか感想を述べる。 14 宿題プリントを受け取り、次時の活動について確認する。

soft sell, high context culture, indirect, image-oriented, group society, social harmony, politeなどが挙げられる。そして、最後にどちらのコマーシャルが好きかと尋ねたところ、ほとんどの学生が日本のCMが好きだと答えた。日本のCMは、日本人の国民性にあったイメージを重視したCMが作成されているからであろう。

「異文化理解」の授業の6回目と7回目で、日米のCMを比較して授業を行った理由は、今後学生がプレゼンテーションを実施する予定で、その前に、1つの模範を示したかったためである。学生がプレゼンテーションをする際に、単に事実だけを紹介するのではなく、何故そのような事象があるのかをよく考え、深く掘り下げた内容のプレゼンテーションをして欲しかったためである。しかしながら、日米テレビコマーシャル比較の授業内容が詳細にわたり、しかも2回の予定でいたが、授業も3回にわたって取り扱うことになり、学生にとっては間延びした内容になったため、上位5つの授業内容より若干評価が低かった理由と考えられる。また、CMの内容が古くなってきたことも、学生が興味をあまり示さなかった原因かもしれない。今後この内容を取り扱う場合、CMをアップデートして授業内容改善に取り組みたい。

一方、「外国の事情や異文化に対する理解があまり深まらなかった」授業内容は、「Points of view: Kanji manはどちらに動くか」(12.1%)、「文化とは何か」(13.8%)、「伝統芸能」(24.1%)、「ステレオタイプ、偏見、文化の多様性」(27.6%)、「異文化コミュニケーション」(29.3%)である。これらの授業内容に共通して言えることは、英語のプリントの読解などを中心としたレクチャー型の授業だったことである。また、抽象的な内容も多かったことが、評価が低い原因かもしれない。今後、学生がより能動的に学修する「アクティブ・ラーニング型」授業に改善したいと考える。

### 4.3 異文化や日本文化についてのプレゼンテーション

「異文化や日本文化についてプレゼンテーションをしたり聞いたりしたことで、異文化や日本文化に関する理解が深まりましたか」という質問に対して、約9割が「とても深まった」と回答し、「少し深まった」(12.1%)を合わせると、全員が異文化や日本文化に関する理解の深化を認めている。プレゼンテーション自体をしたことを「とても良かった」と思う学生は85%で、「まあ良かった」と思う学生14%をあわせると、1人を除く全員がその意義を認めている。その理由を具体的に記入してもらった内容をまとめると次のようになる。利点として、大きく5つに分類できる。それは、異文化に関する理解の深まり、日本文化に関する理解の深まり、学ぶことに対する興味関心の向上、プレゼンテーションをすること自体の利点、プレゼンテーションを聞くことの利点である。下記に、学生が書いた言葉をほぼそのまま引用してまとめる。同様の内容で多少文言が違うものはまとめて、( )に人数を示した。

#### 1. 異文化に関する理解の深まり

- ・ 様々な国の文化の違いなどを知ることができた。(6)
- ・ 異文化や他国の文化について自ら調べ発表することで、知識と興味関心を深めることができた。(11)
- ・ 日本と他国の違いを知ることができ、理解を深められた。(3)
- ・ 外国の文化を学ぶことができ、日本の常識は世界の常識ではないこと、自分の固定観念を壊し、世界観を広げることができた。
- ・ 外国の文化についてとてもよく知ることができた。初めて知ることや、初めて見る写真が多く、訪れてみたいと思う国が増えた。
- ・ 調べる過程で、知識を増やすことができ、楽しく異文化に触れることができた。

#### 2. 日本文化に関する理解の深まり

- ・ 日本にいながら知らないこともあり、日本の文化について詳しく知ることができた。(3)
- ・ 日本のことを改めて素晴らしいと思えた。
- ・ 日本文化の素晴らしさ、奥深さに改めて気付くことができた。

#### 3. 学ぶことに対する興味関心の向上

- ・ いろいろなことを調べるので、多くのことを吸収することができた。(3)
- ・ 調べるうちに自分自身の興味や関心を持つことができた。(4)
- ・ 自分でその国を調べることにより、日本と比較することができとても勉強になり楽しく学ぶことができた。(2)
- ・ 調べる前までは、日本を基準として考えていましたが、調べていくうちに視野を広げることでもっと広く考えることができるようになることがわかりました。
- ・ 異文化を座学で学ぶだけでなく、自分で調べてプレゼンテーションすることで、より日本と海外との違いに興味を持った。

- ・ 調べていくうちに異文化のことについてもっと知りたいと感じた。(5)
- ・ 自分自身も初めて知ることが多くて、内容も興味を引く面白さがあった。(2)
- ・ 情報収集するなかで、もともと興味があった内容ではあったものの、より深く理解することができた。私の発表は政治に関する内容だったので、学んだ内容を新聞やニュースを読む際にいかすことができた。

#### 4. プレゼンテーションをすること自体の利点

- ・ プレゼンテーションをすることで、人前で話すことに自信がついた。
- ・ 自分たちで調べて、パワーポイントを作って、その作業を行っていく中で理解が深まっていた。(2)
- ・ プレゼンテーションをすることでより詳しく調べようと思った。
- ・ みんなの前で発表するためによく調べて、どうすればわかりやすいかを考えたことで、人の話を聞くだけより頭に入りやすかった。
- ・ 自分たちの発表に興味を持ってくれて楽しかった。

#### 5. プレゼンテーションを聞くことの利点

- ・ みんながそれぞれ違うトピックを、いろいろな国を調べていて、プレゼンテーションを聞くのが楽しかった。クイズもあって、楽しく聞くことができた。
- ・ みんな発表が工夫されていて印象深いものばかりだった。(2)
- ・ 友達の発表だったので一生懸命聞いて知識になった。
- ・ 他の人の発表も興味深く、質問する機会もあり理解を深められた。(2)
- ・ 他の人の発表を聞くことで自分の知らない世界を知ることができた。(3)

#### 6. 反省点

- ・ みんながすごくいいプレゼンテーションをしたが、自分はもう少し準備に時間をかけたかった。
- ・ もっと調べておけばよかった。(2)

以上の自由記述から、プレゼンテーションを体験して良かったと思う理由として、異文化や日本文化に関して理解が深まっただけでなく、さらに異文化のことについてもっと知りたいと感じたこと、学ぶことに対する興味関心の向上、プレゼンテーションをすることや聞くことが楽しかったことなどが多く指摘されている。やはり、教師の一方的な講義を聞くのではなく、自ら調べまとめて発表したことが自信となり、自分のグループだけでなく他のグループの発表に関しても興味を持つことができたと考えられる。反省点として、準備に時間をかけられなかったことが挙げられていたが、これはもっとより良い発表をしたかったという気持ちからであろう。プレゼンテーションを実施することにより、異文化に対する主体的な学びを促進し、興味関心を深めることが判明した。

#### 4.4 カルチャーファイルの作成

カルチャーファイルは、「異文化理解」の授業における最終課題である。最初の授業で説明し、冬休み明けの授業でファイルを提出させている。内容は、プレゼンテーショントピックとして挙げた中から5つ以上のトピックを選択し、日本と他国を比較した結果を英語でまとめる。画像やデータ等を掲載し、1つのトピックにつき、最低A4で2ページ以上記述しなければならない。なるべく多くの国と比較をさせるため、比較する国がすべて同じ国にならないように指導している。また、グループ発表したトピックもカルチャーファイルに含んで良いことになっている。ただし、プレゼンテーションでは、日本語を使用して良いことにしているが、カルチャーファイルはすべて英語で書くことになっている。

「異文化や日本文化について調べ、カルチャーファイルを作成したことについてどう思いますか」という問いに対して、「とても良かったと思う」が67.2%、「まあ良かったと思う」が32.8%で、全員が肯定的な評価をしている。その理由を具体的に記入してもらった内容をまとめると次のようになる。理由は大きく3つに分類できる。それは、日本と海外の文化についての学修、文化を学ぶ以外の利点、プレゼンテーションとの関連である。下記に、学生が書いたことをほぼそのまま引用してまとめる。同様の内容で多少文言が違うものはまとめて、( )に人数を示した。

##### 1. 日本と海外の文化についての学修

- ・ 様々な国を調べ、比較することで文化の違いやその国の特徴について学ぶことができ、よかったと思う。(21)
- ・ 日本との違いをそれぞれのトピックで調べることができ、日本のことについて理解が深まり楽しかった。日本の良さも改めて気づくことができた。(16)
- ・ 自分の興味の分野を調べることができ、楽しく作成でき、また異国のことについて関心を持つことができた。(9)
- ・ カルチャーファイルを作ってみて、日本と異国の文化の違いを比較することで新たな発見があった。視野が広がったと思う。(2)

##### 2. 文化を学ぶ以外の利点

- ・ いろいろなトピックについてまとめたり考えたりすることは大変だったが、このファイルのおかげで日本と外国を比較することができ、外国に行きたいという気持ちが高まった一方、外国と日本は違うところも多いので気をつけようと思った。(2)
- ・ 完成したものを他の人と見比べたときに、自分が思いつかなかったテーマや、知らなかったことを楽しみながら比較することができた。(3)
- ・ 英文でのファイル作成だったので、ライティング力も身に付いた。(2)
- ・ 自分で調べるのは大変だったが、自分の知りたい国以外にも興味を向けて、しかもそれを英語で表現することで文化を学ぶ以外に英語の勉強に役立った。(2)
- ・ とても大変でしたが、実際に完成した時の達成感と、すべてを英語に訳したことで自分の理想以上のものができました。

- ・ 調べてファイルにまとめることによって、覚えることもできたし、確かに大変だったが、自分の頑張りが目に見えたのでうれしかった。
- ・ テーマに沿ってどの国にするかとても悩みましたが、世界にはこんな面白い国があるということを知ることができ、写真を貼って作成していく段階もとても楽しかった。

### 3. プレゼンテーションとの違いや関連

- ・ プレゼンテーションより時間はかかったが、じっくりと異文化について深く学ぶことができた。
- ・ プレゼンテーションで友達が発表していて興味を持った国の文化についても、自分で改めて調べて知ることができた。
- ・ 大変だったが、プレゼンを聞いて興味を持ったことについてさらに深めることができた。プレゼンを聞くことによって、トピックを絞り込みやすくなった。
- ・ プレゼンテーションと違い、言葉で書く作業だったから難しかった。

以上のように、カルチャーファイルを作成して良かった理由として、様々な国について調べ知識が深まり、さらに日本文化についての理解も深まったことが多く挙げられていた。それ以外に、英語力の向上、作成の楽しみ、実際に完成した時の達成感、プレゼンテーションをきっかけに興味を持ったトピックについてさらに深く調べることができたことなどが指摘されていた。

要望として、「英語でまとめるのが難しく、日本語で書いても良いのではないか」という意見があった。確かに、1年生後期に英語だけで5つのトピックについて日本との文化比較をするファイルを作成することは、かなり時間もかかり大変な課題であることは推測できる。しかし、学生たちの中には、英語力の向上を指摘し、大変だったゆえの達成感を指摘するものもいる。英語科の専門教育科目であり、英語を使った授業や英語での課題をなるべく重視していきたいため、今後もカルチャーファイルの作成は英語で実施していきたいと考える。また、「カルチャーファイルが活かせる場所や見せる人がいればさらに作った甲斐もあり良いと思う」という意見もあった。確かに、学生たちは、提出時に他の学生が作成したカルチャーファイルを交換して見せ合ったり、ペアで説明しあったりしているが、もっと活用できる場があると良いと思う。日本文化については、海外研修に行くときにホストファミリーに見せたり、海外からの留学生などが来たときに活用したりするようにと指導しているが、実際使用している学生は少ないようであり、今後の検討課題である。

### 4.5 「異文化理解」の授業の影響

図3は、「異文化理解」の授業の影響（学習成果）を示している。「異文化理解の授業を履修して、多様な文化や価値観を受容し、異文化に対する理解を深めることができるようになったと思いますか」という質問に対し、49人（84.5%）の学生が「そう思う」、9人（15.5%）の学生が「まあそう思う」と回答している。また、「異文化理解の授業を履修して、異なる文化を持つ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいと思うようになりませんか」という問いに

対しても、同じ割合の回答となっている。次に、「日本の文化と外国の文化との類似点や相違点について考えるようになったと思いますか」という質問に対しても、「とてもそう思う」(44人, 75.9%)と「まあそう思う」(14人, 24.1%)を合わせると全員がその成果を認めている。これらに比べて評価が低いのは、英語力向上と日本文化理解である。「異文化理解の授業は、英語力向上にどの程度役に立ったと思いますか」という質問に対し、「とても役に立った」と回答しているのは24人(41.4%)で、「少し役に立った」の方が33人(56.9%)と多く、「あまり役に立たなかった」も1人(1.7%)いる。また、「異文化理解の授業を履修して、日本文化についてより深く知り、英語で説明することができるようになったと思いますか」という問いに対しては、「まあそう思う」が36人(62.1%)と最も多く、「とてもそう思う」と「あまりそう思わない」が同率(19.0%)となっている。つまり、「異文化理解」の授業の学習成果として、異なる文化を持つ人々と積極的に関わりたいという興味関心が高まり、異文化と日本文化の相違点や類似点について考えるようになったが、英語力向上という点では学習成果がやや低いと考えられる。今後、異文化理解を促進していく中で英語力を向上させていくことが課題である。

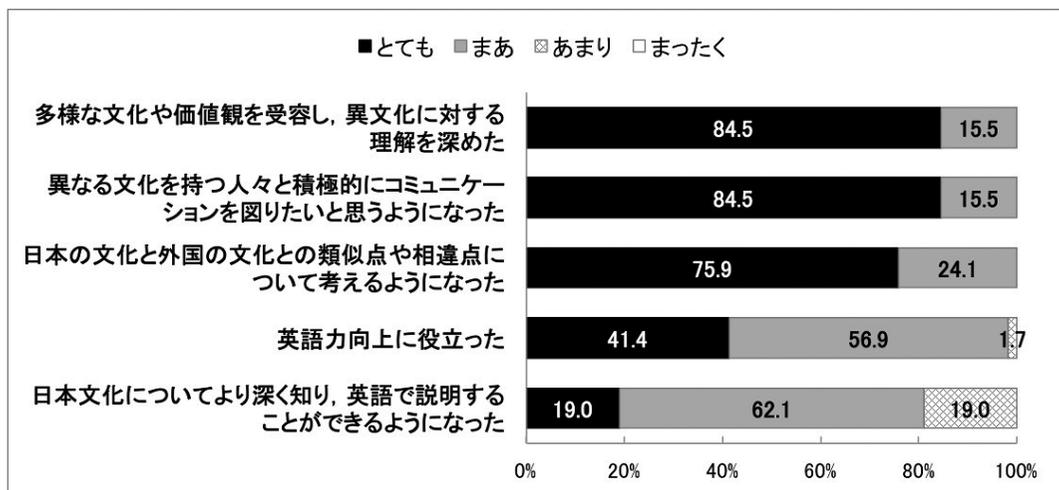


図3 異文化理解の授業の影響

#### 4.6 将来の希望

図4に将来の異文化交流に関する希望をまとめてある。「あなたは、将来、様々な国に行って異なる文化を持つ人々と交流したいと思いますか」と尋ねたところ、「とてもそう思う」が43人(74.1%)、「そう思う」が13人(22.4%)である。また、「あなたは、将来、異なる文化を持つ人々と一緒に仕事をしたいと思いますか」という質問に対しては、6割近くが「とてもそう思う」と答え、4割弱が「まあそう思う」、3人(5.2%)が「あまりそう思わない」と回答している。将来において、異文化交流体験希望者が多く、仕事でも異なる文化を持つ人々と一緒に仕事をしたいという割合が高いことは注目に値する。今後グローバル社会が進展していくなかで、異文化交流に対して、積極的な若い学生が多いことは大変好ましい結果といえよう。

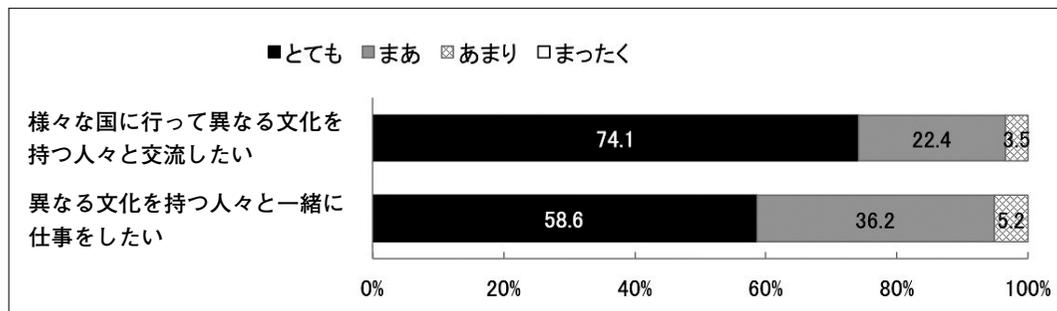


図4 将来の異文化交流希望

#### 4.7 授業に関する要望・意見

「異文化理解」の授業に関する要望や意見を尋ねたところ、「プリントなどいろいろな資料が用意されていて、すごく分かりやすかった」、「ビデオを見て学ぶことがよくあり、映像から学ぶとより印象に残った」、「プリントやビデオなどを通して楽しみながら様々な文化や考え方に触れることができ、とても良かった」、「この授業を通して、異文化に対する好奇心が増した」という肯定的な意見が寄せられた。要望として、「コミュニケーションについての問題は大変難しく感じたので、授業で解説してもらえましたが、和訳も欲しいと思った」という学生が1人いた。やはり、学生の読解力の差があり日本語訳を求める学生がいることも否定できない。このような学生たちのために、全訳を渡さないとしても概略を日本語でまとめたプリントを配布することも検討する必要があるかもしれない。

### 5. まとめ

本稿では、短期大学における異文化理解教育の意義と課題を考察するために、鹿児島純心女子短期大学英語科の「異文化理解」を履修している学生に、アンケート調査を実施し分析した結果をまとめた。結論として、「異文化理解」の授業は、学生の異文化や日本文化に関する理解を深める上で大変有益であるといえる。特に、異文化に関するプレゼンテーションの実施とカルチャーファイルの作成は、学生たちから高く評価されており、異文化に関する興味や関心を一層深めたと考える。また、授業の形態としても、講義形式よりもビデオ等の視聴覚教材を活用し、学生に主体的に関わらせる内容の方が、評価が高いことが判明した。課題の一つとして、異文化理解の学習を進めるなかで英語力の向上を促進していくことが挙げられる。また、実際の異文化交流体験を含んだ授業展開を検討していくことも必要であろう。つまり、学ぶ主体である学生が興味を持ち、やる気が出てくる教材と環境を準備していく必要がある。今後、文化背景の異なる人との異文化コミュニケーション能力を向上させていくために、学生の主体的・能動的な学修であるアクティブ・ラーニング型授業の充実に取り組んでいきたいと考える。

## 参考文献

- Menzel, P. & D'Aluisio, F. (2005). *Hungry planet : What the world eats material world*. Berkeley, Calif.: Ten Speed Press.
- Williams, J. (2007). *50 Facts that should change the world*. Cambridge: Icon Books Ltd.
- 秋山高二 1994. 「テレビ広告から見た日米文化比較」『異文化理解とコミュニケーション2』 pp. 43-64. 三修社.
- 池田香代子・スミス, ダグラス 2001. 『世界がもし100人の村だったら』マガジンハウス.
- インターナショナル・インターンシップ・プログラムズ 2010. 『イラスト日本まるごと事典 改訂第3版』講談社.
- ウィリアムズ, ジェシカ 2007. 『みんなで考えよう 世界を見る目が変わる50の事実』(酒井泰介訳) 草思社.
- ウィリアムズ, ジェシカ (出演), 2007. 「世界を見る目が変わる50の事実」『世界一受けたい授業』日本テレビ, 2007年7月21日
- 開発教育協会 2016. 『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら 第5版』開発教育協会.
- 国立政策研究所 2016. OECD生徒の学習到達度調査 (PISA2015)  
Available: <http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/> [2017年8月]
- 椿鬼奴 (取材), 2011. 「結婚式が派手な国ランキング」『なんでもワールドランキング ネブ & イモトの世界番付』日本テレビ, 2011年12月6日
- 二宮皓 2013. 『新版 世界の学校-教育制度から日常の学校風景まで-』学事出版.
- 二宮皓 (出演), 2006. 「時間割から見る世界の学校」『世界一受けたい授業』日本テレビ, 2006年12月9日
- ベネッセ教育総合研究所 2015. 「中高の英語指導に関する実態調査2015」  
Available: <http://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=4776> [2017年8月]
- ホーガン, P. J.・バス, ロナルド 2009. 『ベスト・フレンズ・ウエディング』[DVD], ソニー・ピクチャーズエンタテインメント.
- 溝上由紀・柴田昇 2009. 「異文化理解と外国語教育-教養教育の一形態として-」『愛知江南短期大学紀要』第38号, pp. 31-42.
- メンツェル, ピーター・ダルージオ, フェイス 2006. 『地球の食卓-世界24か国の家族のごはん』(みつじまちこ訳) TOTO出版.
- メンツェル, ピーター (出演), 2006. 「地球の食卓」『世界一受けたい授業』日本テレビ, 2006年7月8日
- 文部科学省 2010. 『高等学校学習指導要領 外国語編・英語編 平成21年12月』開隆堂出版
- 文部科学省 2001. 平成13年度文部科学白書第1部 21世紀の教育改革 第4節臨時教育審議会答申とその後  
Available: [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200101/\\_2\\_013.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200101/_2_013.html) [2017年7月]

文部科学省 2013. トビタテ！留学JAPAN 2017. トビタテ！留学JAPANとは？

Available: <http://www.tobitate.mext.go.jp/about/index.html> [2017年7月]

文部科学省 2017. 中学校学習指導要領解説 外国語編 平成29年7月

Available: [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/04/1387018\\_10\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/04/1387018_10_2.pdf) [2017年7月]

